

色名の翻訳と作品の変容 — *Les rivières pourpres* の場合

吉城寺 尚 子

【要旨】

小説 *Les rivières pourpres* におけるタイトルおよびキーワードは、英語版では *blood-red rivers* と訳された。色調が変わるとともに、血脈というキーワードの解がより露わになり、高貴な血筋の者が用いるという *pourpre* 色の含意は失われた。日本語版では「緋色の川」と訳された。古来の緋色は高位の朝服や僧衣に用いられ、また深緋は *pourpre* 色に類似する。近代に *scarlet* の訳語として定着した緋色の色調イメージは *pourpre* とは大きく異なるが、犯罪や聖痕における血を暗示する色名となっている。小説 *Les rivières pourpres* が映画化されたとき、血のイメージが多用された。キーワード自体の視覚化はごく短時間にとどめられ、その意味は登場人物の会話音声によって解説された。日本語字幕と吹替え音声では「深紅の川」とされた。深紅は *crimson* からの翻訳で、映画において緋色のイメージは消えた。映画はさらに続編も制作されたが、キーワードはヒットした前作の主人公が再び活躍することを示す記号に過ぎないものとなった。

キーワード： *pourpre*、*blood red*、*crimson*、クリムゾン、緋色、*scarlet*

1. はじめに

フランスのミステリ作家ジャン=クリストフ・グランジェは 1998 年、小説 *Les rivières pourpres* を出版した¹。ベストセラーになり、同年ラジオ放送局と書評誌が主催する RTL-Lire 文学賞（1992 年に創設）を、ミステリ作品としては初めて受賞した。2000 年には映画化され、「フランスでは公開後二か月たらずで三百万人もの観客動員数を記録する異例の大ヒットとなった」²。2001 年には日本での映画公開と同時に小説の日本語訳『クリムゾン・リバー』が出版された。同書はフランス語原著からの翻訳だが、映画の日本語タイトルに合わせ、翻訳書の書名は映画の英語タイトルをカタカナ表記したものになっている。

原著の書名は「*pourpre* 色の川」というほどの意味だが、英訳された小説の書名は *Blood-red Rivers*、映画化されるにあたり、映画の英語タイトルは *The Crimson Rivers* となった。映画の邦題が「クリムゾン・リバー」となり、映画公開に合わせて出版された日本語訳書の書名は

『クリムゾン・リバー』だが、本文の中では「緋色の川」と訳された。Pourpre, blood red, crimson (クリムゾン)、緋色、と4種の色名が登場するが、これらの色調はそれぞれ異なるので、どの言語で経験するかにより作品のイメージは変わることになる。本稿では、*Les rivières pourpres* を題材に、色 (イメージ) から色名 (ことば) へ、ある言語 (フランス語) から別の言語 (英語、日本語) へ、小説 (文字) から映画 (映像) への翻訳・変換の様相と、それらが引き起こす作品の変容について考察したい。

2. Les rivières pourpres

フランス南東部、山麓の大学町ゲルノンで無惨な殺人事件が起こる。同じ頃、数百キロ西に離れた別の町サルザックで、奇妙な墓荒らし事件が起こる。前者をフランス司法警察の警視正ニーマンズが、後者を田舎町の警部カリムが捜査するうちに、数々の謎めいた事件が連鎖的に起こり、二つの事件は思わぬ形で交わり展開していく。

書名となった言葉 *les rivières pourpres* は、ゲルノンで二人目の被害者の捜査のおり、ニーマンズが発見したノートに、謎めいた一節として現れる。

NOUS SOMMES LES MAÎTRES, NOUS SOMMES
LES ESCLAVES.
NOUS SOMMES PARTOUT, NOUS SOMMES NULLE PART.

NOUS SOMMES LES ARPENTEURS.
NOUS MAÎTRISONS LES RIVIÈRES POURPRES.³

ゲルノンで凄惨な連続殺人が展開する一方、サルザックの墓荒らし事件は、十数年前に死んだ少女ジュディットに関する謎を露呈する。それを追っていたカリム警部は、ゲルノンで最初に殺害された被害者の住まいで、壁紙に隠された書き込みを発見する。

JE REMONTERAI LA SOURCE
DES RIVIÈRES POURPRES

JUDITH⁴

3. Blood-Red Rivers

Les rivières pourpres は 1999 年、Ian Monk 翻訳の英語版が発行された⁵。書名は Blood- Red Rivers、ノートと壁の書き込みは、以下のように訳された。

[ノートの書き込み]

WE ARE THE MASTERS, WE ARE THE SLAVES.

WE ARE EVERYWHERE, WE ARE NOWHERE.

WE ARE THE SURVEYORS.

WE CONTROL THE BLOOD-RED RIVERS.⁶

[壁の書き込み]

I SHALL REACH THE SOURCE

OF THE BLOOD-RED RIVERS

JUDITH⁷

4. The Crimson Rivers／クリムゾン・リバー

映画は 2000 年 9 月 27 日にフランスで上映され、日本では 2001 年 1 月 27 日、英語圏においては 2001 年 3 月 25 日にオーストラリア（フランス映画祭）、6 月 8 日に英国、28 日にオーストラリア、29 日に米国で上映が開始された。フランス語圏での映画のタイトルは小説と同じ *Les rivières pourpres* だったが、英語圏では *The Crimson Rivers*、日本では英語タイトルに合わせて「クリムゾン・リバー」と題された⁸。

5. 緋色の川

小説の日本語訳は平岡敦により、日本での映画公開と同時に出版された⁹。書名は映画に合わせて『クリムゾン・リバー』となり、ノートと壁の書き込みの部分は、以下のように訳された。

[ノートの書き込み]

我らは支配者にして奴隷

我らはあまねくありて、いずこにもなし。

我らは測量士

我らはクリムゾン・リバー緋色の川を制す。¹⁰

[壁の書き込み]

緋色の川の源に

わたしは遡る

ジュディット¹¹

6. Pourpre

Pourpre という語は古代ギリシア語 *porphýra* (πορφύρα) に起源を持つ。地中海に生息する巻貝の呼び名から、その腺から出る分泌液で染めた色、染色した布や衣服を指すこととなり、ラテン語 *purpura*、フランス語 *pourpre* となった。英語の *purple* も同じ語源を持ち、しばしば *pourpre* の英訳語として *purple* が用いられる。また日本語では「貝紫」という色名もあるが、これらの色調は *pourpre* と同じではない。古い用例を見ると、10 世紀末以来 *pourpre* (*purpure*, *purpura*, *porpre*, *purpre*) の色を “*rouge foncé*” を意味する例が複数あり、日本語でいう「紫」より赤色寄り、暗い（濃い）色とされてきたことがわかる。18 世紀になって “*rouge vif*”（鮮やかな赤）を示す用例が見られる¹²。

現代では *pourpre* は「赤」と「紫」の間に位置する色とされている。CIE（国際照明委員会）が 1931 年に定めた CIE XYZ 表色系による xy 色度図における底辺の直線部分を「純紫軌跡」と呼ぶが、この軌跡付近の帯状の部分が *pourpre* の範囲とされる¹³。

AFNOR（フランス工業標準化協会）が 1977 年に定めた色彩分類によると、*pourpre* は *rouge* と *violet* の間に位置し、*rouge*～*magenta*～*pourpre-rouge*～*pourpre*～*pourpre-violet*～*violet-pourpre*～*violet* というグラデーションが設けられている¹⁴。*Violet* は日本語では「堇色」と訳されるが、「紫」より青色寄りである。

1927 年に始まった RAL（ドイツ納入条件委員会）の色規格は現在 6 カ国語表記になっており、古典色のフランス語名に *pourpre* という語が含まれる色としては、RAL3004、RAL4006、RAL4007 の三色がある¹⁵。RAL3004 は仏語名 *rouge pourpre*（独語 *Purpurrot*、英語 *purple red*）、RAL4006 は仏語名 *pourpre signalisation*（独語 *Verkehrspurpur*、英語 *traffic purple*）、RAL4007 は仏語名 *violet pourpre*（独語 *Purpurviolett*、英語 *purple violet*）である。

RAL の製品販売サイトが、目安としてそれぞれの色に与えられた RGB 値と CMYK 値を示しているので、両者を記しておく。Rouge pourpre (RAL3004) の RGB 値は (107, 28, 35)、CMYK 値は (30, 100, 70, 40) で、フランスの規格では *pourpre* を帯びた *rouge* ということになる。古文献に現れる “*rouge foncé*” には比較的近いかもしれない。「黄」が入るので、*pourpre*

より赤みが強いというよりは、日本の色名でいう「えび茶」に近く見える。Pourpre signalisation (RAL4006) の RGB 値は (144, 51, 115)、CMYK 値は (40, 100, 0, 15) で、日本の色名の「紫」に比較的近いが、やや「赤」に傾いて見える。Violet pourpre の RGB 値は (71, 36, 60)、CMYK 値は (70, 100, 10, 70) で、やや「青」が強くなり、日本の色名でいう「江戸紫」に比較的近い。フランスの規格では上に述べたように pourpre を帯びた violet がこの名で呼ばれる。

7. Tyrian purple

Pourpre と purple は同じ語源を持ち、ときどき互いの訳語として用いられるが、それぞれの色名の指す範囲は同じではなく、pourpre の方が purple より赤味を帯びている¹⁶。巻貝（プルプラ）の分泌液に由来する色という意味では、Tyrian purple という名称が用いられる。古代フェニキアの都市 Tyros の紫というほどの意味である。布を染めるには膨大な量の巻貝（プルプラ）が必要で、この染料は非常に高価で貴重なものだったので、その使用は身分の高い人々に限られていた¹⁷。

よく知られている例としては、ラヴェンナのサン・ヴィターレ聖堂に残るユスティニアヌス帝の肖像が挙げられる。ラヴェンナには 6 世紀にビザンツ帝国の総督府が置かれ、現在では当地に残る初期キリスト教時代の建築群が世界遺産に登録されている。6 世紀に建築されたサン・ヴィターレ聖堂の壁面には、ビザンツ皇帝ユスティニアヌス 1 世と廷臣たちを描いた壮麗なモザイク画が残るが、皇帝がまとっている赤紫系の色のマントがこれに当たる¹⁸。

また、この色で染めた羊皮紙を用いた一群の古写本 Codex Purpureus が残されている。挿絵によりよく知られている例としては、「シノペ福音書」「ロッセーノ福音書」「ウィーン創世記」などがあり、いずれも 6 世紀制作のギリシア語写本である¹⁹。

Codex Purpureus の制作はカロリング朝やオットー朝の皇帝、中世初期イングランド王などのための写本として復活したが、植物性の色素などで代用されることもあったようである。このような例としては、「皇妃テオフアナの結婚証書」²⁰ が挙げられる。これは神聖ローマ帝国の 2 代目皇帝オットー 2 世とビザンツ皇帝の姪テオフアナとの結婚 (972 年) に際して作られた文書である。羊皮紙を継いで縦長にした巻物文書で、現状では黒に近い濃色と暗い赤系の色で地模様が描かれた上に、金色で文字が記されているが、20 世紀の科学調査により、巻貝（プルプラ）由来の染料ではなく、鉛やアカネ由来の顔料 (madder lake) が用いられたことがわかっている²¹。

8. 緋色

「緋色」は一般的に、どのような色と捉えられているだろうか。その範囲は広く、大別すると二つの系統に分けられる。一つは鮮やかでやや黄を帯びた赤、もう一つは暗く、ときに紫

に近い赤である。「緋色」ということばで画像検索をかけると、前者の範疇の色の方が数多く出現する。日本語版ウィキペディアにおいて「緋色」は「スカーレット」の項目中に分類され、一例として示される色は CMYK 値が (0, 83, 70, 0) である²²。

しかし古くは後者の範疇の色だった。『日本色彩大鑑』²³は、古代、平安時代、江戸時代の文献に現れる色名と天然染料で絹布を染めた色見本の集成および解説巻で構成されている。以下に当該書から「緋色」に関係する部分を抽出して再構成・検討する。(以下、本稿の引用文中における下線は、全て引用者による。)

〔孝徳天皇朝服の制 飛鳥時代〕 7世紀中葉

〔孝徳朝の元年に大化改新が起り、大化三年に七色十三階の冠制が設けられた。冠に対応する朝服の色は〕「織・繡冠＝深紫、紫冠＝浅紫、錦冠＝真緋、青冠＝紺、黒冠＝緑となり」²⁴

〔孝徳朝服制においては、緑が新しい色として登場し、^{ふかきはなだ}紺が濃い藍色を表現している以外〕「赤（茜）の名称が真緋に変わった他は前代から知られていた色である」²⁵

したがって、この「真緋（あけ）」に対応する色見本は、日本色彩の主要材料による色として示された「茜」と同じく暗い赤を示している。この茜（植物）は日本茜で、色素はプルプリンを主成分とする（西洋茜はアリザリンとプルプリンを主成分とする）が、紫に傾く青みは感じられない²⁶。

〔持統天皇朝服の制 飛鳥時代〕 7世紀末

〔前の天武朝時代には、紫根染による4種の紫が現れていた。〕「持統朝では天武朝時代にはなかった茜色を再び採用」²⁷

この「緋（あけ）」も「茜」と同じく暗い赤を示す²⁸。

〔大宝・養老衣服令 奈良時代〕 8世紀初頭、中葉

〔大宝令において〕「直冠上の四階は深緋^{こきあけ}と初めて紫根染と茜染との交染の色を位階に採用させている。「下の四階は浅緋」として持統朝服時代の緋の茜染の色名の上へ浅を付けて区別」²⁹とある。親王一位、諸王一位、諸臣一位から八位、諸臣初位の順に、朝服の色のランクは、黒紫（深紫）～赤紫（浅紫）～深緋～浅緋～深緑～浅緑～深縹～浅縹³⁰となり、紫が最高位、緋色がこれに次ぎ、各色では色の濃いものが高位になっている。

この「深緋（こきあけ）」は紫根染と茜染を重ねたもので、色見本はややえび茶に近い濃い紫色を示している。「浅緋（あさあけ）」は「茜」と同様である³¹。

養老律令における女性の凡服色は、上から、白～黄丹～紫～蘇芳～緋～紅～…と19色が記

されているが、この「緋」も真緋や浅緋と同じ茜色〔暗い赤〕である³²。なお、2番目の「黄丹（おうに）」の色見本は、現代の“もう一つの緋色”（黄みを帯びた鮮やかな赤）に近い。

〔延喜式縫殿寮「雑染用度」〕 平安時代 10世紀前半

延喜式中の条項「縫殿寮「雑染用度」には、色彩や染色の様子が述べられている。布や糸、染料、発色剤などの種類や量が記されているが、不明なものや明らかに多すぎるもの等ある。ここに「深緋（こきあけ）」「浅緋（あさあけ）」もあり、深緋は「綾一疋 茜大四十斤 紫草卅斤 灰三石 薪八百四十斤 米五升」、浅緋は「綾一疋 茜大卅斤 米五升 灰二石 薪三百六十斤」とある。深緋の場合、紫根と茜は別々に染色する必要がある。またこの分量どおりの染色では濃過ぎて黒くなってしまう。色としての「深緋」「浅緋」は大宝・養老衣服令に同じである³³。

9. 高貴の色

小説の中で、ノートと壁面に現れる奇妙な書き込み、とりわけ“les rivières pourpres”が何を意味するのかという謎が主人公を悩ませる。一連の犯罪の原因には、ある種の優生学的思想を持つ人々の閉ざされたコミュニティが深く関わっていた。自分たちを優越した種族と考へ、その血統を人為的に守り抜こうという策謀が連綿と続いてきたことが判ってくる。Pourpre 色の川とは、優越種族の系譜を意味していたのである。それは血脈でもあるが、高貴を示す色 pourpre でなければならなかった。高貴な出自を意味する“born in the purple”という表現があるが、これも pourpre 色の斑岩（または巻貝（プルプラ）で染めた布）に由来する³⁴。

日本でも前述のように、朝服の色としては紫が最高位、緋色がそれに次ぐ格を得ていた。仏教の世界にも紫衣（しえ）、緋衣（ひえ）がある。『新纂浄土宗大辞典』によれば、日本における紫衣とその権威については平安末期の資料に現れる。官服の色制にならぬ、はじめは紫衣のほうが上位だったが、緋衣に似た赤衣・紅衣を出家した皇族男子らが着るようになったことで江戸時代から順序の逆転が起り、緋衣が最高位となった³⁵。

緋色の中でも茜と紫根で染めた「深緋」は pourpre に近い色調だったと言え、小説 *Les rivières pourpres* の日本語訳者が pourpre の訳語に「緋色」をあてたのは、興味深い選択だったと言えよう。2017年に出版された『100語でわかる色彩』は、フランス語版クセジュ文庫の翻訳で、色に関係する100のキーワードを解説する新書である。ここでは通常「堇色」と訳される項目名 Violet に「紫」の訳語をあて、本文中の pourpre に「緋色」の訳語をあてた上、「^{パープル}緋色」とカタカナ英語のルビをふっている³⁶。これも興味深い工夫だと思う。

小説の日本語訳者は、1カ所 pourpre 以外の語に「緋色」をあてている。物語の本筋とは直接関わらない導入部で、主人公が犯罪者を追って未知のアジア系大使館に入り込んでしまう。その室内のペロア張りの壁面の色 rouge impérial は「鮮やかな緋色」と訳されている³⁷。

10. 血の色

Les rivières pourpres は小説の英語訳では Blood-Red Rivers と訳された。Blood red は文字どおり血の色の赤であり、pourpre の紫のニュアンスは感じられない³⁸。色（視覚イメージ）ではなく血統や血脈という象徴的な意味が翻訳されている。

小説の中で、キーワード les rivières pourpres の意味を解き明かすヒントとして、血のイメージが用いられている。ノートの書き込みが発見されたときの状態は、次のように描写される。

Ces lettres semblaient écrites avec du sang. [.....] Comme si l'auteur de ces lignes n'avait pu s'empêcher de cracher sa folie en lettres écarlates.³⁹

その文字は、まるで血で記されたかのようにだった。[.....] まるでこれを書いた者は、真っ赤な文字の中にその狂気を叩きつけずにおれなかったかのように。⁴⁰

The letters looked as though they had been written in blood. [.....] As if the author of these scarlet lines had not been able to contain his madness.⁴¹

ノートの赤い文字は血ではなくインクだったことがのちにわかるが、壁面の書き込みが発見される場面は、次のように描写される。

Inscrit sur le mur, il pouvait lire la fin d'une inscription sur le mur, il pouvait lire la fin d'une inscription brunâtre. Le seul mot qu'il discernait était : POURPRES. [.....] L'écriture était celle d'une enfant et l'encre utilisée était du sang.⁴²

壁に褐色の文字で何か書かれている。読み取れるのは、《緋色の》という一語だけだった。[.....] 子供っぽい筆跡で、血を使って書かれていた。⁴³

On the wall, he could make out the end of an inscription written in brown. The only word he could read was "RIVERS". [.....] The handwriting belonged to a child, and it was written in blood.⁴⁴

本物の血で書かれたらしい書き込みは、褐色に変色していた。ここでは発見者の警察官（カリム）が壁紙を剥がしていくと、最初に POURPRES という単語が現れるのだが、英語版では BLOOD-RED ではなく RIVERS に変えられている。端から現れるのは末尾の単語が自然ということで、翻訳者が語を変えたのであろう。

やがてキーワードの意味が明らかになり、血脈という意味での「血」ということばで説明される。

[.....] “Nous maîtrisons les rivières pourpres.” Ces termes ne désignaient pas un livre ou un réseau hydrographique, mais le sang des habitants de Guernon.⁴⁵

「《我らは緋色の川を制す》これは何かの書物や水路を示しているのではなく、ゲルノンに住む人々の血を意味していたのさ。」⁴⁶

英語版では、pourpres を blood-red と翻訳しているので、この部分を英訳すると「血の色の川は人々の血を意味していたのさ」ということになり、間が抜けてしまう。そこで英語版翻訳者はキーワードを説明するこの部分をすっぱり省略している⁴⁷。

もう 1 カ所、血と色にまつわる表現があるので挙げておきたい。物語の結末近く、血まみれの犯行現場が発見されるとき描写である。

Les deux hommes s'engouffrèrent cette fois un seul mouvement.

L'odeur cuivrée leur jaillit au visage.

Du sang.

Du sang sur les murs, sur les tuyaux de fonte, sur les disques de bronze posés au sol.⁴⁸

それから二人の男は、一気になかに駆け込んだ。

赤褐色の臭いが顔に押し寄せる。

血の臭いだ。

血まみれだった。壁も、鑄鉄のパイプも、床に置いた青銅の円盤も。⁴⁹

The two men dived in together.

A pungent stench gripped their nostrils.

Blood.

Blood on the walls, on the cast-iron pipes, on the rings of bronze lying on the floor.⁵⁰

Cuivre は「銅」で、cuivré はその形容詞である。血の金属的なにおいを表現しているが、「赤銅色の」という意味もあり、色の表現でもある。日本語訳では「赤褐色の臭い」と、においを色で表現した訳になっている。英語の pungent は鼻を刺すようなにおいの形容で、cuivré の金属的な感じを翻訳しているが、色のニュアンスはない。

11. Crimson、scarlet、緋色

映画の英語タイトルは *blood-red* が *crimson* に変更される。*Crimson* は日本語では「深紅」「真紅」と訳されることが多いが、純色の赤よりやや紫に傾いた色である⁵¹。*Crimson* はレヴァントや南欧の木に棲む虫（ケルメス）からとられた赤い染料で、染められた絹布がイタリアからヨーロッパに広まり、その色や染料を示すイタリア語から英語 *cremesin*, *crimson* へと変化した⁵²。

日本では江戸期に「猩々緋」⁵³という色名が登場するが、これは古い時代の茜で染めた緋色とは異なり、原材料は *crimson* のと同属の、メキシコ原産の虫（ケルメス）である。鮮やかな赤にやはり青みが少し入る。この虫による染料や色は、ギリシア語では種子という意味の *kokkos* と呼ばれ、ラテン語の *coccum*, *coccus* に変化した⁵⁴。

英語の *scarlet* は、*coccinum* の訳語として用いられる。ウルガタ聖書（ラテン語）からの英語訳ドゥエ=ランス聖書(DRB, 1582年)において、*scarlet* という語は *coccinum*, *coccumque*, *coccoque*, *cocco*, *coccineus*, *coccineum*, *coccinea* の訳語として 39 回現れ、*vermiculum*, *vermiculo*, *vermiculumque*, *vermiculum* の訳語として 19 回現れる。*Vermiculus* は虫すなわちケルメスを意味するので、ウルガタ聖書においては *coccum* と同意と考えられる。他には *croceis*, *murice* の訳語として 1 回ずつ現れる⁵⁵。*Croceis* は黄、金、サフラン色、*murice* はプルプラ貝やその染料、それで染めた布を意味する。

しかし *scarlet* は現代では *crimson* と異なり、やや黄に傾く鮮やかな赤と捉えられている⁵⁶。もともと古フランス語 *escarlate* に由来するが、これは色ではなく高価な布を意味する語だった。現代のフランス語 *écarlate* は、*scarlet* の訳語として用いられるが、17 世紀には名誉や権力のしるしとして *pourpre* と同義であったという⁵⁷。*Pourpre* と *scarlet* は現代の感覚では同じ色と感ずることはできないが、「6. *Pourpre*」で述べた “*rouge vif*” を意味する 18 世紀の例—ヴォルテールの短編 *Zadig*—では、*pourpre* という語は 2 カ所に現れ、それぞれ英訳本では *red*, *scarlet* と訳されている。どちらも、女性の魅力的な肌の血色を描写する文脈で、原文は以下のとおりである⁵⁸。

ses joues animées de la plus belle pourpre mêlée au blanc de lait le plus pur; (Chapitre XIII. Le rendez-vous.)

[.....] et l'éclat de la pourpre de Tyr n'était pas plus brillant que l'incarnat qui animait cette blancheur. (Chapitre XVII. Le pêcheur.)

英語版（1749 年刊）の対応箇所では、*pourpre* は *red* および *scarlet* と訳されている⁵⁹。

her lovely Cheeks, glowing with White and Red, (Chap.XII. The Rendezvous. [129])

and the red that adorn'd her blushing Cheeks was ten Times more lively than any Tyrian Scarlet. (Chap.XIV. The Fisherman. [152])

2005年に刊行された日本語版（植田祐次訳）では、*pourpre* は「深紅」と訳されている⁶⁰。

限りなく純粋な乳白色にすこぶる美しい深紅色の混じった生き生きとした頬、（第13章 密会）

ティールの町の染料の深紅の輝きも、その肌の白さを引き立てる鮮やかな薄紅色ほどにはすばらしくないでしょう。（第15章 漁師）

Scarlet は日本語では「緋色」と訳されることが多い。「8. 緋色」の項で述べた「鮮やかでやや黄を帯びた赤」という解釈は、12世紀後半にはすでにあつたようだが⁶¹、この解釈は近代になって「緋色」が *scarlet* の訳語として用いられるようになり、一層広まったように思われる。

よく知られている例は、小説の題名『緋文字』と『緋色の研究』であろう。ナサニエル・ホーソンによる *The Scarlet Letter* は1850年に刊行された。最も古い日本語訳は富永徳磨（富永蕃江）によると思われる。単行書としては『緋文字』（東文館、1903年11月）として出版されたが、その直前『福音新報』第398号（1903年2月12日発行）の文学欄に「緋文字 ホールソン著『スカーレット・レッタァ』の翻訳、蕃江生、第一回、獄の前」として抄訳の連載が始められている。以後、多数の翻訳が出版されているが『緋文字』という題名がほぼ定着している⁶²。

不義の子を産んだ罰としてヘスター・プリンが胸につけた「A」の縫いとりは、“the scarlet letter” という以上の色の説明はほとんどないが、“seemed to derive its scarlet hue from the flames of the infernal pit”⁶³ [その緋色は地獄の炎から来ているように見えた] とあり、緋色の原義でもある火の色がイメージされている。そしてこのヘスターについて、ベリンガム総督は “such a child's mother must needs be a scarlet woman, and a worthy type of her of Babylon!”⁶⁴ [そんな子供の母親は緋色の女に違いない、まさにバビロンの女の典型に！] と述べる。「バビロンの女」は『ヨハネ黙示録』に現れる「バビロンの大淫婦」のことで、19世紀中葉に広く使用されていた欽定訳聖書（KJV, 1611年）では、次のように描写されている。

...and I saw a woman sit upon a scarlet coloured beast, full of names of blasphemy, having seven heads and ten horns. And the woman was arrayed in purple and scarlet colour, and decked with

gold and precious stones and pearls, having a golden cup in her hand full of abominations and filthiness of her fornication: ⁶⁵

『緋文字』の結末近くでは、ディムズデル牧師が群衆に罪を告白し、自らの胸を露わにする。そこにヘスター・プリンのものと同じ緋文字が印されていた、と後日多くの人々が語った。牧師に現れたこの“stigma”は、罪の烙印であると同時に stigma という語ゆえ「聖痕」の血のイメージも重なる。

アーサー・コナン・ドイルによる *A Study in Scarlet* は 1887 年に刊行された。最も古い日本語訳は『毎日新聞』の連載で「血染の壁」と題された。その後、翻案や翻訳がさまざまなタイトルで出されたが、『壁上の血書』『疑問の指輪』『深紅の一糸』『スタディ・イン・スカレット』『深紅の糸』などのうち、延原謙訳の「緋色の研究」（1931 年）以降、このタイトルがほぼ定着した⁶⁶。現代では crimson の訳語とされることが多い「深紅」が二例見られる。

原著の本文において、題名の意味は物語の前半部途中で、シャーロック・ホームズがワトスンに語る中で説明される。

“ [.....] I might not have gone but for you, and so have missed the finest study I ever came across: a study in scarlet, eh? Why shouldn't we use a little art jargon. There's the scarlet thread of murder running through the colourless skein of life, and our duty is to unravel it, and isolate it, and expose every inch of it. [.....] ” ⁶⁷

ホームズは、人生 (life) という色のない糸のかせの中に、殺人 (murder) というスカーレット色の糸が 1 本通っている、とたとえる。*A Study in Scarlet* の中で殺人が必ずしも流血を伴うわけではないが、それでもこの scarlet は、血の色を強力に連想させる。というのは、古い邦題に「血染の壁」「壁上の血書」とあるとおり、最初に発見された殺人現場の壁には、不可解な語が血で書かれていたからである。

I have remarked that the paper had fallen away in parts. In this particular corner of the room a large piece had peeled off, leaving a yellow square of coarse plastering. Across this bare space there was scrawled in blood-red letters a single word—

RACHE. ⁶⁸

物語の本体に“scarlet”という語が現れることはなく、ここでは廃屋の壁紙がはがれた部分に“血のように赤い文字で” RACHE と書かれていた。発見した刑事は、血で書かれたものに違いない、と判断する。

奇しくも *Les rivières pourpres* においても、壁に血で書かれた文字が謎めいた手がかりとして現れた。「2. Les rivières pourpre」で述べた2番目の書き込みである。また、1番目のノート
の書き込みが発見されたときの様子は、次のように描写されている。

Ces lettres semblaient écrites avec du sang. [.....] Niémans songea à une colère frénétique, à une gayer rougeoyant. Comme si l'auteur de ces lignes n'avait pu s'empêcher de cracher sa folie en lettres écarlates.⁶⁹

[日本語訳]

その文字は、まるで血で記されたかのようだった。[.....] そこには激しい怒り、灼熱の噴出を思わせるものがあった。まるでこれを書いた者は、真っ赤な文字のなかにその狂気を叩きつけずにおれなかったかのよう。⁷⁰

Écarlate は先に述べたように英語の scarlet に対応しており、血で書いたような文字を「スカーレット色の文字」と表現しているのである⁷¹。

12. テキストとイメージ、映像と音声

小説の場合、全ての色彩はテキストの読者の脳内でイメージされる。原作の読者がキーワードから想起するのは（敢えて日本語で表現すれば）赤紫色の水流である。Rivières（川）は血脈あるいは系譜を意味しているが、その色 *pourpre* は希少な材料から得られ、高貴な血筋の限られた者だけに許された色という原義をもつ。なぜ *pourpre* 色なのかという理由は、事件の核心——自らを優秀な種族と位置づけ、その血筋を人為的に拵え継承しようとしてきた人々の存在——の解明によって初めて明らかになる。

英語版ではキーワードが *blood-red rivers* と翻訳され、英語版読者は文字どおり血のような赤の流れを想起することになり、これは *pourpre* 色とは異なるイメージである。*Pourpre* 色にあった原義のニュアンスが消えると同時に、*blood* には血統のような「象徴的な血」の意味もあることから「血の色の川は血脈・系譜を表す」という、ある意味わかりやすいキーワードになってしまった。もちろんストーリー展開と謎解きの魅力に変わりはないが、キーワードの含意と神秘性を少々減じる結果となり、英訳版ではキーワード解説の会話を削ることで不自然さを防いでいる。

日本語版では「緋色の川」と翻訳された。緋色のイメージは少々複雑で、現代では黄みがかかった鮮やかな赤をさすことが多いが、暗い赤をさす場合もあり、どのような色として想起されるかは、かなり幅があると言える。いずれの場合も *pourpre* 色とは異なるが、古代の緋色である暗い赤、特に深緋（こきあけ）は比較的 *pourpre* 色に近い。また、真緋（あけ）の

朝服や仏僧の緋衣（ひえ）は、高貴な出自を表す *pourpre* 色の意味に通じるところがある。

緋色は近代になって *scarlet* の訳語として用いられるようになり、*scarlet* 色のイメージを持たれるが、*scarlet* のほうでは古くは *pourpre* の訳語として用いられた例がある。また *scarlet* は『緋文字』『緋色の研究』に見られるように、血の色や血の表象とも関係が深く、この点で「緋色の川」という訳語は原語のキーワードが象徴するものをよく反映している。

小説 *Les rivières pourpres* の映画化⁷² にあたり、原作者グランジェ自身が監督マチュー・カソヴィッツと共に脚本を手がけた。106 分の映像に転換された物語の細部は当然のことながら変更・簡略化され、結末も大きく改変された。

映画は小説のテキストを視覚化するが、キーワードである「*pourpre* 色の川」自体は視覚化されない。映画という膨大な視覚情報を眼前にしている鑑賞者が、映像に現れない *pourpre* 色の川を具体的にイメージする余裕はあまりない。極論すれば、キーワードが「青い川」であっても「黄色い川」であっても、鑑賞者が映画作品から受け取るイメージに大きな違いはない。小説ではキーワードの謎解きに主人公が試行錯誤する時間があるが、映画の主人公は専ら「アクション担当」で、フレーズやキーワードの解説と解説は、他の登場人物の話す言葉に任せている。

原作小説において発見された、謎の詩句が記されたノートのかわりに、映画では、殺害された大学図書館司書が準備していた博士論文が発見される。論文の革張りの表紙には、ラテン語らしき標題が 4 行刻印され、これは小説におけるノートの書き込み“*NOUS SOMMES LES MAÎTRES, [.....]*” の 4 行に対応すると想定されている⁷³。しかしこの標題が映るのは一瞬で、映画鑑賞者が文字を読み取ることはできない。ニーマンスが不器用にラテン語標題の音読を始めると、大学学長の息子が“*Nous sommes les maîtres, nous sommes les esclaves. Nous sommes partout, nous sommes nulle part. Nous maîtrisons les rivières pourpres.*” と、フランス語に訳し、説明する。これは原作のノートに記された詩句の 1、2、4 行目に当たる。

原作では壁紙に隠された書き込みとして発見された第 2 のフレーズは、映画では一連の事件に関わりがあるらしいアヌシーの眼科医シェルヌゼの病院で見出される。事件と眼科医との関連を察知したニーマンスとマックス（小説のカリムに相当）が眼科医のもとに急ぐが、彼は惨殺された直後だった。被害者は磔刑像のように吊され、現場は血まみれである。夜の雷の閃光で、天井に近い壁面に血で描きなぐったらしい文字が照らし出される。

JE REMONTERAI A LA SOURCE DES RIVIERES POURPRES

次の瞬間に殺人犯らしき人物が飛び出し、追跡劇へと移行するので、このときも文字が映るのは一瞬である。が、のちの現場検証の場面で壁面が短時間映り、マックスが“*Je remonterai à la source des rivières pourpres...*” と第 2 のフレーズをつぶやくことで、映像から文字を読み

取る鑑賞者の困難を補っている。

映画ではキーワードを文字として見せる場面はごく短時間である一方、文字どおりの「血」のイメージがふんだんに視覚化されている。そして最終的なキーワードの解説は、大学図書館で司書の博士論文を調査していた憲兵隊長により行われ、ニーマンスとの会話によって鑑賞者に示される。Les rivières pourpres の意味を尋ねるニーマンスに、憲兵隊長は“Le sang des hommes parfaits.” [完全なる人々の血] と説明する。ニーマンスが“Le sang...les veines...” [血...血脈...] とつぶやき、憲兵隊長による一通りの解説ののち、“l'eugénisme” [優生学] といった言葉が交わされる。この会話により、映像による視覚的な血の赤、抽象的な「血脈」という意味、pourpre 色の含意が結びつけられ、鑑賞者もキーワードの意味と事件の全体像を把握することになる。

この会話はフランス語のため、フランス語以外の鑑賞者は字幕または吹替え音声を視聴する。日本版 DVD の場合、キーワードは字幕と吹替え音声では「深紅の川」と表記・発音され、緋色という訳語は使われていない⁷⁴。これは映画の英語タイトルに合わせ、crimson の訳語を採用したためと思われる。

13. むすび

ミステリ小説の「謎」は、難解でなければ結末まで読者の興味を牽引していくことができないが、同時に「解説」できたときには説得力がなければならない。翻訳はいかなる場合も困難と妥協を伴うが、そのような「謎」としての色のイメージと意味を翻訳するのは存外難しい。Les rivières pourpres の場合、フランス語、英語、日本語のどれで読むかによって異なる色の川が想起され、翻訳では原語の色名の含意は失われざるをえない。また原語 les rivières は複数形で、支流に分かれたり傍流から流れ込むという「血脈・系譜」の視覚表現であることが、謎解きのあとでは納得できるが、複数形のない「川」という日本語からは、かたちの想起は難しい。

映画の場合は短時間でわかりやすくストーリーを展開する必要があり、謎のフレーズの紹介も解説も登場人物の会話音声により簡潔に行われる。膨大な視覚表現の中にあって、キーワードが表象する色や形は鑑賞者にとって小さく不明瞭なものとなるだろう。

小説は続編などあり得ない結末で終わっているが、映画は結末を大幅に変えて当たり、2004年には Les rivières pourpres 2 (The Crimson Rivers 2/クリムゾン・リバー2) が制作された。同じ主人公が同様の猟奇的事件解決に活躍することだけが前作との共通点で、もちろん pourpre 色の川は登場せず、ストーリー上の繋がりもない。「Pourpre 色の川」は、小説を貫いていた不気味なテーマの象徴ではなく、「大当たりしたアクション・スリラー映画」を表す単なる記号になってしまった。それが何色と翻訳され、鑑賞者がどんな色を想起しようが作品の意味には何の影響もなく、その意味では色を失ってしまったと言えるかもしれない。

【注】

- ¹ Grangé, Jean-Christophe. *Les Rivières Pourpres: Roman*. Paris: Albin Michel, 1998. Print.なお本稿を書くにあたっては Grangé, Jean-Christophe. *Les Rivières Pourpres: Roman*. Paris: Librairie générale française, 2011. Print.を参照した。
- ² 平岡敦「訳者あとがき」、ジャン=クリストフ・グランジェ（平岡敦訳）『クリムゾン・リバー』東京創元社、2001年、p.490.
- ³ 注1文献（2011年版）p.219.
- ⁴ 注1文献（2011年版）p.316.
- ⁵ Grangé, Jean-Christophe. *Blood-red Rivers*. London: Harvill, 1999. Print.なお本稿を書くにあたっては Grangé, Jean-Christophe. *Blood-red Rivers*. London: Vintage, 2003. Print.を参照した。英語訳は Ian Monk による。
- ⁶ 注5文献（2003年版）p.161.
- ⁷ 注5文献（2003年版）p.233.
- ⁸ “The Crimson Rivers (2000).” *IMDb*, IMDb.com, www.imdb.com/title/tt0228786/. (2018年9月29日参照)
- ⁹ ジャン=クリストフ・グランジェ（平岡敦訳）『クリムゾン・リバー』東京創元社、2001年。
- ¹⁰ 注9文献 p.245.
- ¹¹ 注9文献 p.350-351.
- ¹² “TLFi.” *SUCRE : Etymologie De SUCRE*, www.cnrtl.fr/etymologie/pourpre. (2018年9月29日参照)
- ¹³ 図は、“Pourpre.” *Wikipedia*, Wikimedia Foundation, 2 Aug. 2018, fr.wikipedia.org/wiki/Pourpre#/media/File:Line_of_purples.png. (2018年9月29日参照) ただし当該箇所では purple を説明する図が pourpre の説明に流用されている。
- ¹⁴ 図は、“Pourpre.” *Wikipedia*, Wikimedia Foundation, 2 Aug. 2018, fr.wikipedia.org/wiki/Pourpre. 中の “Champ chromatique des pourpres selon AFNOR X08-010 (couleurs saturées)” を参照のこと (NF X08-010 は1977年2月策定、2014年8月30日失効)。(2018年9月29日参照)
- ¹⁵ “RAL CLASSIC Colours.” *RAL Colours/RAL CLASSIC Colours*, www.ral-farben.de/content/anwendung-hilfe/all-ral-colours-names/overview-ral-classic-colours.html. (2018年9月29日参照)
- ¹⁶ Purple の色空間は、pourpre と violet に分かれる。菊栽培家協会の「色彩目録」（1905年）によると、英国の purple、米国の deep purple はむしろ Violet pourpré と呼ぶべきである（注14サイト、Wikipédia フランス語版 “Pourpre” の項）。
- ¹⁷ 英語版 Wikipedia の “Tyrian purple” の項では、Tyrian purple の別名として Phoenician purple、royal purple、imperial purple という名称が紹介されている。ただし別項目において、royal purple は17世紀以降は Tyrian purple より青みの強い色の名として使われていることも記されている (“Shades of Purple.” *Wikipedia*, Wikimedia Foundation, 15 Aug. 2018, en.wikipedia.org/wiki/Shades_of_purple.)。

- ¹⁸ Basilica di San Vitale, Ravenna.
- ¹⁹ *Sinope Gospels* (Codex Sinopensis), 6th century, 30 x 25 cm, Bibliothèque nationale de France, Paris; *Rossano Gospels* (Codex purpureus Rossanensis), 6th century, 188 folios, 31 x 26 cm, Museo Diocesano e del Codex, Rossano; *Wiener Genesis*, 6th century, 24 folios surviving, 31.5 x 25.5 cm, Österreichische Nationalbibliothek, cod. theol. gr. 31, Wien.
- ²⁰ *Marriage Charter of Empress Theophanu*, scroll, 144.5 by 39.5 cm, State Archives of Wolfenbüttel, 6 Urk 11.
- ²¹ Bruno Reudenbach, “ ‘The Marriage Charter’ of Theophanu: A Product of Ottonian Manuscript Culture”, *Manuscript Cultures* 10 (2017): 15-30.
(https://www.manuscript-cultures.uni-hamburg.de/MC/articles/mc10_reudenbach.pdf) (2018年9月29日参照)
- ²² “スカーレット.” *Wikipedia*, Wikimedia Foundation, 18 Oct. 2017, ja.wikipedia.org/wiki/スカーレット.
(2018年9月29日参照)
- ²³ 松本宗久『日本色彩大鑑』(全5冊・別巻1) 河出書房新社、1993年。
- ²⁴ 注23文献、別巻p.35.
- ²⁵ 注23文献、別巻p.36.
- ²⁶ 注23文献、一 古代の色、別巻p.18-19.
- ²⁷ 注23文献、別巻p.39.
- ²⁸ 注23文献、一 古代の色。
- ²⁹ 注23文献、別巻p.40.
- ³⁰ 注23文献、別巻p.40の記述を簡略化。
- ³¹ 注23文献、一 古代の色。
- ³² 注23文献、別巻p.44-45、一 古代の色。
- ³³ 注23文献、別巻p.58-64、一 古代の色。
- ³⁴ この言い回しはビザンツ帝国において、皇帝が帝位についている間に生まれた皇帝の子どもに与えられる名称 *porphyrogenetos* に由来する。Pourpre 色の斑岩で内装した部屋、または巻貝(プルブラ)で染めた布を下げた皇妃の部屋で生まれたことを意味する。この呼び名を持つ人物としては、結婚証書のテオフアヌ(c.955-990)とほぼ同時代の、キエフ大公妃となった Anna Porphyrogenita (963-1011) およびビザンツ皇帝 Constantine VII Porphyrogenetos (905-959) がいる。後者が生まれるとき、父のビザンツ皇帝レオン6世と母ゾエ・カルボノブシナとの結婚は正式に認められていなかったが、正統性を示すために皇妃の産室で生まれたという。
- ³⁵ “緋衣.” *WEB版新纂浄土宗大辞典*, jodoshuzensho.jp/daijiten/index.php/緋衣. “紫衣.” *WEB版新纂浄土宗大辞典*, jodoshuzensho.jp/daijiten/index.php/紫衣. (2018年9月29日参照)
- ³⁶ アマンディーンヌ・ガリエヌヌ(守谷てるみ訳)『100語でわかる色彩』白水社、2017年、p.136-137.
- ³⁷ 注1文献(2011年版)p.18、注9文献p.15.
- ³⁸ “Blood Red.” *Wikipedia*, Wikimedia Foundation, 12 Sept. 2018, en.wikipedia.org/wiki/Blood_red. Blood red の項に4種の色見本(22, 100, 100, 17)(21, 100, 100, 14)(28, 100, 100, 36)(32, 83, 100, 36)が呈示

されているが、CMYK 値はいずれも C が低く Y は高く、茶系の暗い赤を示している。(2018 年 9 月 29 日参照)

³⁹ 注 1 文献 (2011 年版) p.218-219.

⁴⁰ 注 9 文献 p.245.

⁴¹ 注 5 文献 (2003 年版) p.161.

⁴² 注 1 文献 (2011 年版) p.316.

⁴³ 注 9 文献 p.351.

⁴⁴ 注 5 文献 (2003 年版) p.233-234.

⁴⁵ 注 1 文献 (2011 年版) p.416.

⁴⁶ 注 9 文献 p.456.

⁴⁷ 注 5 文献 (2003 年版) p.306.

⁴⁸ 注 1 文献 (2011 年版) p.430.

⁴⁹ 注 9 文献 p.472.

⁵⁰ 注 5 文献 (2003 年版) p.318.

⁵¹ “Crimson.” *Wikipedia*, Wikimedia Foundation, 20 Sept. 2018, en.wikipedia.org/wiki/Crimson. Wikipedia 英語版で例として挙げている色の sRGB 値は (220, 20, 60)、CMYK 値は (0, 100, 100, 40)。(2018 年 9 月 29 日参照)

⁵² “Crimson (n.)” *Index*, www.etymonline.com/word/crimson#etymonline_v_355.; “Kermes (n.)” *Index*, www.etymonline.com/word/kermes#etymonline_v_42956. (2018 年 9 月 29 日参照) Crimson と赤い染料をとる虫 kermes は共通の語源をもつ。

⁵³ 注 23 文献、別巻 p.219、五 江戸の色。

⁵⁴ “Cocco-.” *Index*, www.etymonline.com/word/cocco-. (2018 年 9 月 29 日参照) ただし coccum にはスカーレット・オーク (*Quercus coccinea*) の実という意味もある。

⁵⁵ *Douay-Rheims Catholic Bible Online, Verses, Search, Study.*, www.drbo.org/drl/index.htm. (2018 年 9 月 29 日参照)

⁵⁶ “Scarlet (Color).” *Wikipedia*, Wikimedia Foundation, 8 Aug. 2018, en.wikipedia.org/wiki/Scarlet_(color).; “Shades of Red.” *Wikipedia*, Wikimedia Foundation, 9 Sept. 2018, en.wikipedia.org/wiki/Shades_of_red. (2018 年 9 月 29 日参照)

⁵⁷ “Écarlate.” *Wikipedia*, Wikimedia Foundation, 7 July 2018, fr.wikipedia.org/wiki/Écarlate. (2018 年 9 月 29 日参照)

⁵⁸ Voltaire. “Zadig, Ou La Destinée, Histoire Orientale.” Project Gutenberg, 3 Sept. 2018, www.gutenberg.org/cache/epub/4647/pg4647-images.html. 原文は 1747 年刊、1829 年版テキストより引用。(2018 年 9 月 29 日参照)

⁵⁹ “ZADIG;” Project Gutenberg, www.gutenberg.org/files/18972/18972-h/18972-h.htm. (2018 年 9 月 29 日参照)

⁶⁰ ヴォルテール (植田祐次訳) 『カンディード 他五篇』岩波書店、2005 年、p.160, p.172.

- ⁶¹ 『日本国語大辞典〔第2版〕』（第11巻、小学館、2001年）の「緋色」の説明には2番目の意味として「黄の下染めに紅花で染めた色。火色」として『山家集』の「もみぢよる網代の布の色染めてひをくくりとは見ゆるなりけり」という歌を例に挙げている。
- ⁶² 鈴木進「THE SCARLET LETTER、日本における最初の翻訳『緋文字』と富永蕃江」『湘南国際女子短期大学紀要』7(2000): 59-74; 鈴木進「『緋文字』邦訳小史」『湘南国際女子短期大学紀要』8(2001):144-127.
- ⁶³ “THE SCARLET LETTER.” www.gutenberg.org/files/25344/25344-h/25344-h.htm. Chapter III [79]. (2018年9月29日参照)
- ⁶⁴ 注63 文献 Chapter VIII [132].
- ⁶⁵ “Revelation Chapter 17 KJV (King James Version).” *King James Bible Online*, www.kingjamesbibleonline.org/Revelation-Chapter-17/. Chapter17:3-4. (2018年9月29日参照)
- ⁶⁶ 新井清司「『緋色の習作』移入史余談」小林司・東山あかね(編)『シャーロック・ホームズ大事典』、東京堂出版、2001年、p.651-652.
- ⁶⁷ “A STUDY IN SCARLET.” www.gutenberg.org/files/244/244-h/244-h.htm. Chapter IV. (2018年9月29日参照)
- ⁶⁸ 注67 文献 Chapter III.
- ⁶⁹ 注1 文献 (2011年版) p.218-219.
- ⁷⁰ 注9 文献 p.245.
- ⁷¹ ノートの文字は血液でないことが、のちに判明する。また壁の文字は、*A Study in Scarlet* と *Les rivières pourpres* どちらの場合も被害者の血ではないことが明らかになる。
- ⁷² 映像の確認は DVD (Kassovitz, Mathieu, Jean-Christophe Grangé, Jean Reno, and Vincent Cassel. *Kurimuzon Ribā: Deraksuban*. Tōkyō: Paioniaerudīshī, 2001.) でおこなった。
- ⁷³ DOMINI SVMVS. SVMVS SERVE. / □□ICVMQVE. NUSQUAMQUE. / VERSAMVR PVRPVREIS. / LUMINIBUS IMPERAMVS. [sic] これは小説の中でノートの書き込みにあった4行の詩句をラテン語訳したように見せているが、実際には意味をなしていない。DOMINI SVMVS は“we are masters”だが、むしろ“we are the Lord’s”（新約聖書「ローマ人への手紙」第14章8節）の意味で知られる。SERVE は正しくは SERVI。次の語は UBICVMQVE であれば“wherever”、NUSQUAMQUE は“and nowhere”。VERSAMVR は“we are stirred”の意味か。最後の3語が PVRPVREIS ELUMINIBUS IMPERAMVS であれば“Nous maîtrisons les rivières pourpres.”の意味になる。
- ⁷⁴ 日本語字幕翻訳は松浦美奈、日本語吹替翻訳は石原千麻による。

Translation of colours and transformation of images: a case of *Les rivières pourpres*

Naoko Kichijoji

Abstract

When the French bestseller novel *Les rivières pourpres* by Jean-Christophe Grangé was translated into English in 2000, it was named *Blood Red Rivers*. When the novel was adapted to a movie, its English title was changed to *The Crimson Rivers*.

In Japan, the film was called *Crimson River*. When the novel was translated into Japanese, despite the fact that the translation was from French, it was still named *Crimson River*.

In the Japanese translation of the novel, the word “pourpre” was translated as “hi-iro” and in printed kana “crimson”, along with the Chinese characters “hi-iro”. Pourpre, blood red, crimson, and hi-iro are rather different colour tones. But the addition of the word “scarlet” has etymological and historical significance. Modern Japanese people conceive that hi-iro has wide colour range. One of the reasons may be that the English word “scarlet” has been translated into “hi-iro” since the early twentieth century.

La couleur pourpre is originally made from a very precious dye extracted from sea snails. Because of how valuable it was, its usage was normally confined exclusively to people of prominent rank, like the Byzantine emperors.

In the novel, “les rivières pourpres” refers to a genealogy of a race which self-proclaimed themselves as the elite through the ideology of eugenics. The English translator changed the keyword into “blood-red rivers”, suggesting the symbolic meaning of the word “blood”. The Japanese translation changed the word pourpre into hi-iro because the older tone of hi-iro was dark reddish purple, which resembles pourpre. In addition, hi-iro clothes were traditionally worn by high-class aristocrats and Buddhist priests, so the colour also resembles pourpre. But in the film, even though dialogues and images, a Japanese audience still doesn’t really understand the meaning of the colour “crimson”, let alone why the film’s title is entitled *Crimson River*.